

じやりみち

…被災地支援情報…

第103号 発行日 2014.12.2
被災地 NGO 協働センター

〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10

TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702

HP:<http://www.pure.ne.jp/~ngo/>

Facebook:<https://www.facebook.com/KOBE1.17NGO>

E-mail:info@ngo-kyodo.org

口座番号:01180-6-68556(郵便振替)

阪神・淡路大震災20年の課題

～レジリエンスを引き出すボランティアの可能性～

ここ数年前から、減災の領域では「レジリエンス」という言葉をよく耳にする。作家大江健三郎さんの訳では、「回復力」となる。これは「災害などで被災を受けたものが、苦楽を共にしながら、時には支援者と多様な関係を築き、少しずつ回復する力」と私は理解する。

さて今年も災害が日本列島を襲った。その中で「平成26年8月豪雨災害」での、災害救援ボランティアのあり方について、広島と丹波、そして阪神・淡路大震災を比較し検証してみたい。阪神・淡路大震災では、兵庫県に一つ、神戸市に一つしかボランティアセンターがなく、また初めての大規模災害となったので、そもそも大量に押し寄せるボランティアをコーディネートする機能がなかった。そのため初心者ボランティアあるいは未組織ボランティアが全体の7割を占めるという状況になったが、各々が被災地に入り、被災地内で自然発生的に生まれた自発的なボランティアグループが避難所となった学校に駆けつけた。そして、被災者と共に救援物資の配布や炊き出しの手伝いなど、自分で考え、行動し、大きな混乱もなく、直後の活動を終えた。発災二日後に立ち上がった救援NGOは、「阪神大震災地元NGO救援連絡会議」と、地元とつけたのは「被災地外からのボランティアの窓口は地元が責任持ちますよ!」という意味合いを込めていた。こうした自発的な市民力がその後の復興に大きな影響を与えたと言える。

一方、今回の広島土砂災害においては、避難指示・勧告がなかなか解除されなかったという事情もあり、一時大量のボランティアを受けとめられなかった。被災地の被災者や市民、企業などと自発的に駆けつけたボランティアとが上手く連携し、土砂除去や清掃、炊き出しなどの活動を展開した。その一部を紹介すると、自らも被災した飲食店が、現場での急造ボランティアセンターとして場所を提供し、また地元の企業は移動かまどで鍋料理を振る舞い、地元の大学生や地元のグループが避難所で勉強を教え、地元のNPOは絵本の読み聞かせをするなど、実にさまざまな活動を展開した。東日本の各地から「支援のお返しボランティア」も光っていた。阪神・淡路大震災時と違うのはフェイスブックやツイッターというSNSというツールが活躍し、「移動ボランティアセンター」さながらの役割をしたのが注目された。説明すると、「〇〇で土砂撤去の作業があります。手伝ってくださいませんか?」とスマートフォンで叫ぶと、それを見た広島市民が集まってくるということだ。こうしたボランティア活

動からの学びは、自発的に集まったボランティアが各々で考え、協力しながら、しかも丁寧に被災者からの要望を聞き、「身の丈にあった」活動を展開したことだと言えるだろう。つまり、これからの災害後のボランティアは、可能な限りまず地元のボランティアを集め、地元の文化や被災者を尊重し、被災者と共に活動を展開するということだ。この応急対応から復旧・復興へのレジリエンスをバネに市民力が復興に生かせるかがこれからの課題だ。被災地外のボランティアは、地元のレジリエンスを高めるために後方支援に徹することだ。

さて、広島に比して兵庫県丹波市は、ボランティアを集めるのに苦労した。お隣の京都府福知山の被害と広島の大規模災害に報道が集中したこともあって、なかなかボランティアが集まらなかった。(最終的には人口の少ない丹波に15000人を超えるボランティアが集まった。)でも、ここで注目すべき二つの動きを見逃してはならない。広島ほどの多様性はないが、一つは地元の人たちが、自発的にボランティアの受け入れをしたこと。もう一つは、地域内助けあいとして、阪神・淡路大震災後築いて来た兵庫県内における助けあいのしくみが充実してきたこと(ボラバス派遣、ボラセンサポートなど)。具体的には、兵庫県社会福祉協議会は県内各地の社協からのべ400人を丹波ボランティアセンターに派遣した。さらに県内各地からボラバスを繰り出した。その一団体は、丹波まで片道2時間半もかかる兵庫県たつの市社会福祉協議会だ。地元御津地区で発足した「たつの女性が担う地域防災塾」の協力を得て、ボランティア・バスを2回派遣した。このことから、阪神・淡路大震災後に培われたレジリエントなネットワーク力を活かし、まず県内ボランティアを県内社協がNPOと連携して集め現場に派遣し、被災地外のボランティアが後方支援をしやすい体制を築くことを提言したい。こうしたレジリエンスをバネにした水平的なつながりを重層化することが、阪神・淡路大震災20年を検証することになり、確実に次世代につなげることになるのではないかと思う。(村井雅清)

広島土砂災害・被災者のつぶやき

避難所生活が20日くらいになり疲れている。体育館では神経が高ぶり、周囲のいびきで眠れないの。

(9月4日 40代 女性)

なかなか新しい住居が決まらない。(抽選に外れて)色々経験できた。打たれ強い自分だと思う。前向きにならないと。

(9月15日 50代 男性)

血圧が高めと言われている。弁当類の味付けが辛めで少し困っている。なかなか心労が軽くない。

(9月15日 70代 女性)

また住めるか不安なまま家の片付けに行っている。今の家を買った時は不動産屋から絶対に山は崩れないと言われたらしい。

(9月15日 60代 女性)

災害があつて、ドタバタしっぱなしで足湯している今が一番落ち着いているかもしれないです。こうしてホッとできる場がありがたいです。

(10月4日 50代 女性)

マンションの5階に避難しているけど、期限が3ヶ月だから新しい家に引っ越すの。いろんなところに荷物を分けておいているから引越しが大変。

(11月13日 60代 女性)

この辺りは坂が多いけど歩いて避難できるし、買い物も早く行けるし、災害は起こってしまったけれど、ここで住み続けたいと思ってるの。

(11月13日 60代 女性)

私は災害後1ヶ月くらい集会所に避難していたの。自治会の人には頭が上がりませんわ。(今は別の場所に避難しているけど)

またこっちに戻ってきたいと思ってるの。

(11月23日 80代 女性)

▼安佐北区の「すまいるカフェ」での足湯



これは優れもの！！ (移動式高速炭化炉)

水害で床下に泥や土砂が入った場合、それを撤去した後に竹炭を敷き詰めてあげると、脱臭・調湿の効果がある。2009年の兵庫県佐用町水害のあとに、約200軒の床下に入れたのだが、ある被災者が「この部屋にはピアノを置いていたのですが、下に炭を入れてもらったら、ピアノの音が変わりました。」と喜んで下さったことを思い出す。通常炭焼きというのは、簡易の「ドラム缶窯」で焼いても約24時間はかかり、中味を取り出すにはさらに数時間は冷やさなければならぬ。ところが、この度丹波で実施しているのは、元大阪府立の工業高校の元



▲高速炭化炉を稼働させている様子

▼高速炭化炉で昼食を温めています！



教員の山田先生が開発した「高速炭化炉」なるものをお借りして焼いているが、これは優れもので、なんと約1時間半で炭になる。(ただし取り出すには完全に冷めるまで炉を空けられないが、日帰りができる。)。しかも成功率100%で、竹以外でも何でも炭になる。脱臭・調湿には竹炭が最も効果があることから竹を焼いているが、水害で出た流木もOK!である。この高速炭化炉のもう一つの特徴は、資材のある場所まで炉を運ぶことができるということ。つまり、「移動式高速炭化炉」ということである。是非一度見学に来てください。

(村井雅清)

広島土砂災害救援レポート

8月20日に発生した広島土砂災害からおよそ3ヶ月がたった。当センターでは、土砂災害発生直後の8月25日からスタッフを派遣し、避難所での足湯ボランティア活動を続けてきた。



▲避難所での足湯ボランティアの様子

今回の広島土砂災害では、発災当初から多くのボランティアが被災地に駆けつけた。一時は1日に3000人のボランティアが社会福祉協議会の設置したボランティアセンターに集まった。しかし、避難指示・避難勧告が出ている地域にはなかなか支援が行き届かず、さらには人数が多いためにボランティアセンターの受付が打ち切られるなど、必ずしもボランティアの力が被災地に十分に届けられたとは言えない状況であった。

そうした状況の中、今回の被災地では、自主的にボランティアを集める動きが目立ち、各地で住民が主体となった活動が展開された。ある地域では、自治会長自らがFacebookを使い呼びかけ、1日に150人以上のボランティアが集まったそう。こうしたボランティア活動がなければ、支援の手が入ることが遅れてしまう地域が出ていたであろうことは想像に難くない。

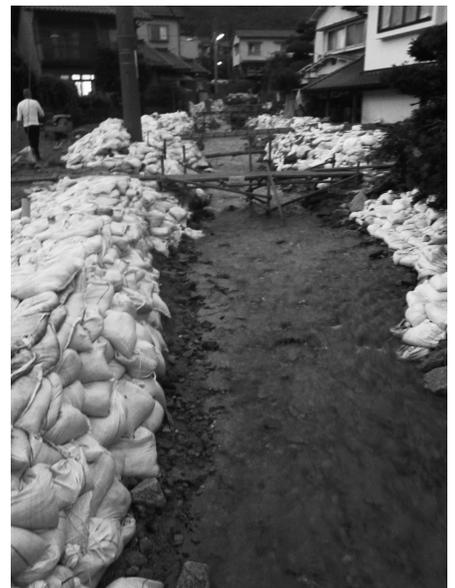
一方で、ボランティアセンターとそうした住民主体の活動との連携がうまく取れなかったことは、今回の反省点としてあげられるだろう。お互いの情報交換の場を持つことがなかなかできなかったために、被災地で何が起きているのか、全体像がなかなか見えてこなかった。土砂崩れの被害は、局地的ではあったが、多くの場所で土砂崩れが起きたために、被災エリアは広く、状況は場所によって様々であったために、情報交換がより必要であったのだが、うまく場が作れなかった。



▲直後の被害の様子

また、これはどの災害でも同じことが言えるが土砂災害の場合は特に、泥出しや瓦礫撤去の活動ばかりに注目が行き、避難所でのボランティア活動や生活支援などになかなか手が回らなかったことも反省点としてあげられる。今回の場合だと、当初から仮設住宅の建設はしない予定になっ

ており、市営住宅・県営住宅への斡旋を行うという方針を広島市は決定していた。そのため、被災者は避難所からバラバラに空きのある公営住宅に引っ越すことになったのだが、そういった方々への引っ越し支援や生活物資の支援などがスタートするタイミングが遅くなってしまった。さらには、自力で民間のマンション等に転居した方などは、どこに移動したのか全くわからなくなってしまった方々も多数いる。こうした方々への支援は未だに課題として残っている。



▲独自のボランティア活動によって積み上げられた土のう

地域に残っている方々も、いつまた崩れるかもしれない山に対して大きな不安が残っている声も多い。これからの地域づくりをどうしていくのかも非常に大きな今後の課題となるだろう。そうした地域づくりに関わる中でも、一人ひとりの声に耳を傾ける足湯ボランティア活動が重要となる。足湯の声の中にも不安を感じている声がある一方で、愛着ある地域を離れたくない、家は持ち家なので簡単には手放せないという声もあり、住民の方々の葛藤が表れている。短期的に解決できる課題でもなく、焦らずじっくりと考え続けることが必要だろう。そういった住民の方々にどのように向き合っていくのかは、簡単に答えの出ることはない。足湯ボランティアのようにひたすら声を聴き続け、一緒に悩み続けることしかできないのではないだろうか？

そうして悩みながらも、声を聴き続けることで地域の在りようが見えてきて、地域の良さ、住民たちのこだわり、そして復興への道筋が見えてくるのではないかと？

これから長きに渡る復興への道を焦らずじっくりと住民の方と話しながら、地元のボランティアと協力しながら共に歩いていけるような活動を展開していけるように足湯ボ

▼独自ボラセンの活動の様子



ランティアの講習会も行っている。地域のボランティアと共に今後も復興に関わり続けたい。(頼政良太)

黒田裕子さんを偲ぶ

に加わられたと聞いた。8月1日に仮設住宅支援連絡会（私が所属する被災地NGO協働センターの前身）が発足したときには、医療・看護分野ではすでに中心的なメンバーのお一人であった。

彼女の団体の拠点に大きな“アルジュリアテント”を設置してあげたのが、交流の始まりだ。以後私が所属していた「ちびくろ救援ぐるーぷ」から毎日のようにボランティアを派遣していた。彼女は仮設住宅の被災者訪問をされるするときに、少しの扉が開いて被災者と話しながらもできるだけ、さりげなく被災者の暮らしぶりを観察するようとか、施錠されているか、新聞受けに新聞が溜まっているか、電気のメーターが回っているか、ゴミ箱の中を見て食事がきちんとできているかなどを観察するようと、細かく丁寧にボランティアを指導されていたのが印象的だった。「さすがだなあ・・・」とよく感心させられた。彼女が率いていた「阪神高齢者障害者支援ネットワーク」の若いボランティアたちとちびくろ救援ぐるーぷの若いボランティアたちは結構仲が良く、活動後にはよく“飲むユニケーション”もしていた。

先述したように彼女がボランティアに接する態度は大変厳しいものがあるが、冗談を交えながら、一方こうした若者の自由な雰囲気にも目を細めながら見守っていた部分もある。彼女の知られざる意外な一面の一つではなかったかと思う。

ところで彼女が亡くなってから、彼女に関する実に多くのマスコミの記事が出ている。阪神淡路大震災以来、全国津々浦々で講演して来られたので、各地域で彼女を慕う人たちにとっては、訃報を聞いて衝撃が走っただろう。その記事の中では、「全身全霊」「不眠不休」という4文字がよくでてくるが、この言葉がこれほどピッタリとはまる人は、彼女をおいて他にはいないだろう。同時に、彼女が懇切丁寧に話す言葉で、藁をもすがりたい思いで苦しんでおられた方々にとって一服の良薬になったことも忘れてはならない。

「黒田裕子を偲ぶ」ということから、私の最も好きな彼女の日常の姿で、

あまり知られていない彼女の一面をお伝えしておきたい。彼女は高校時代、陸上選手であり生徒会長にも立候補されたという話はあまり知られていない。実はいや、このことを言いたいわけではない。のですが、私の事務所から、彼女の事務所まで同じ神戸市内の地下鉄沿線にあることから、時々抜き打ちで彼女を訪ねる。が、私が行くと、お茶菓子付きでいつもおいしい日本茶を振る舞ってくれる。彼女が率いる団体は、普段はディサービスをしているが、そこに来られている利用者は阪神淡路大震災後の仮設住宅で出会った被災者やその後、災害復興公営住宅で出会った被災者たちだ。彼女は、看護師時代はブランド物の洋服しか身につけたことがないというだけあって、講演や大学の講義で外出するときは、見事なコーディネートのもときちんとした洋服を身につけて、颯爽と仕事をこなしていた。しかし、抜き打ちで行ったその日は、ジャージとトレーニングパンツという、ラフな格好だったので、正直驚いた。でも、私には、彼女がその出で立ちで、利用者さんと談笑している姿が、実に「穏やかで、ゆったり」とした感じで、「あつ、彼女の本来の素顔はこれなんだ！」と感激したのである。いつも、このようにいることを許されればいいのになあと思ったほどである。おそらく彼女の人生の中で、このようにゆったりとした過ごす時間はほとんどなかったのだろう。いつも気を張っていなければならなかったから・・・。悔しくて、残念で仕方がない。尊敬の念を込めて、若い人たちが付けた「サイボーグ」というアダナは、黒田裕子をよく知っている者たちの共通語であるが、あまりにもご自分の健康管理を怠ったツケが、このような形で廻ってきたかと思うと、悔しい。もう一度、あの時の普段着での日々を送って頂きたかった。「黒田さん、ほんとお疲れ様でした！」もう、ゆっくりお休み下さい。

(村井雅清)

2014年9月24日、当NGO運営委員でもあった黒田裕子さんが急逝された。余命3ヶ月とガンの宣告を受けていた。

黒田さんは、20年前の阪神・淡路大震災を機に出会った看護師の一人。元宝塚市立病院の看護総副婦長をされていて、大震災後すぐに宝塚市立体育館で避難者の医療支援活動をされ、やがて神戸市内長田区にできた「サルビア」を拠点に被災者支援活動

『鎮魂と復興の祈り～高野山不滅の聖燈を捧げて
～広島土砂災害四十九日法会』を終えて

広島密教青年会会長 薬師寺 猪 智喜

協働センターの「協」の字は、力や能力が飛び抜けて優れていなくても、同じ心を持った者が集まると大きな力になる。心を合わせることで相互に支え合い、それによって自立を導き出すことができるという考えを表しているのだと伺いました。被災地 NGO 協働センターさんとの活動の中で学ばせていただいたのも、正にそれでした。其々の特質を生かしながら個が結びつくことで、個々の活動では成すことができないことを成し遂げられるということでした。

10 月下旬、檀信徒の方々と四国遍路に行ってきましたが、1 人の参加者の鞆に見覚えのあるものが…「絆」のタグの付いたまけないぞうでした。その方は、移動の車中でまけないぞうの意義を懸命に訴えておられました。後から何うと、バザーで求められ、チラシを読まれたのだそうです。SNS 等様々なコミュニティーツールが発達した現代ですが、アナログ的とも言える方法が心を動かし、着実に支え合いの理念を伝えているのを実感しました。

今回の法会は主催者ということではありましたが、被災地 NGO 協働センターさんが長年実践してこられた理念の賜物に過ぎません。

法会を終えた今、活動を通じて伝えていただいたものを、もっとももっと大きくしていかなければと改めて思います。

最後になりますが、増島さん、頼政さん、鈴木さん、そして陰ながらお力添えいただいた村井代表に衷心よりお礼申し上げます。



▲ 49 日法要の様子

東北の被災地から広島の被災地へ
「広島に来て、感じること」

釜石市 不動寺 森脇 妙紀

東日本大震災の発生から 3 年半を迎えようとしていた 8 月下旬、広島で土砂災害が発生した時、釜石の被災者はすぐに広島の被災者の事を心配した。「幼い子どもが犠牲になってやるせない。」「早く救出してあげて…」。釜石の被災者は自ら被災したご自身の経験から広島の被災者の置かれている状況を「自分の事」として捉えておられ、単なる共感以上のものが感じられる。鶴住居の中学生は被災後に応援に来て下さった広島県警の職員あてに「直接送る」からと、市内の商業施設前で募金活動を行い、私の知人で被災者でもあるキッチンカーのコーヒー店主は商品の一つを客が購入すると広島の被災地にコーヒーのドリップパッカー一個を提供するというボランティアを始め、同時にカンパを募った。



▲ 49 日法要での森脇妙紀さん

私は東日本大震災の発生直後から被災地 NGO 協働センター様とのご縁をいただき、平成 24 年 5 月より「まけないぞう」のタオル集めと販路の拡大等に協力させていただいているが、今回の広島土砂災害で地元の真言宗寺院と協働センター様が協働している御縁で 10 月 7 日に行われた 49 日法要に招いていただいた。当日は広島密教青年会が主催し超宗派の 40 名の僧侶で法会と復興祈願を行い、岩手の被災者から贈られたロウソクに皆で献灯した。その後うどんの炊き出しや釜石のコーヒーの振る舞いがあり、皆で一緒に時を過ごした。

私が広島に行って感じたのは、「天災であってもその中に必ずと言っていい程人災の部分が存在する」という事である。天災は完全に防ぐ事は難しいかもしれないが、人災は人間の取り組みに左右される。滅災、備災の為に神戸、東北、広島の教訓を活かしたいと思う。



▲釜石から駆けつけ、被災者にコーヒーを振舞うハピスコヒーの岩鼻さん

ぞう通信。

第 53 号 2014. 12. 2



発行所：被災地 NGO 協働センター 〒 652 - 0801 神戸市兵庫区中道通 2 - 1 - 10
 TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702 http://www.pure.ne.jp/~ngo

東日本大震災から 3 年半が経ちました。そして、今年 7 月～ 8 月に各地で豪雨災害に見舞われ、たくさんの尊い命が奪われました。あらためて亡くなられた方々にお悔やみ申し上げます。その被災地に「まけないぞう」が贈られ、被災者の方に勇気と元気を届けることができました。被災地から被災地のリレーが行われています。

東日本大震災から 3 年半…

東日本大震災から 9 月 11 日で 3 年半の月日が経ちました。報道では「24 万人避難生活続く」「進まぬ住宅再建」「入札不調震災前の 4 倍」「仮設生活 今も 8.9 万人」などまだまだ先行きの見えない深刻な見出しが多かったようです。

実際に被災地を回りながら、被災者の方のお話を聞くと、「復興なんて全然進んでないよ」「私のところが一番遅れている」「あんなに山を削ったら今度は山津波来るよ」という言葉ばかりが聞こえてきます。

自力再建した人、復興住宅へ移る人、仮設やみなし仮設に残る人など、またみなさんバラバラになってしまいます。阪神・淡路大震災でも避難所から仮設、復興住宅へと何度もコミュニティが壊され、その度に孤独や不安に駆られ、自ら命を落とす人、孤立死で見つかる人などせつなく震災で生かされた命が続くことなく、途切れていきました。

東日本大震災も、また同じように自ら命を絶つ人、孤立死や関連死など大津波と原発という過酷事故に遭いながらも生き残った命が失われていきます。阪神・淡路大



▲岩手県の復興住宅

私たちは被災地 KOBE から何を教訓として伝えてきたのか、これなかったのか、時折無力感に襲われます。

そして、今年の夏に発生した 7 月 8 月豪雨水害はまた各地に大きな爪痕を残しました。当センターも先に紹介していますように、スタッフを各地に派遣しました。広島では、まけないぞうを携えて、足湯活動をさせてもらいました。当たり前のことですが、いままで経験したことのない災害にみなさんショックを隠しきれません。水

害の当日はたたきつけるような雨が降り、雷が街中に響き渡り、夜も眠れずに過ごしたいたところに、土砂が家々を飲み込み、74 名の尊い命を奪っていきました。もっと救える命があったのでは…。



◀足湯をしながらまけないぞうをプレゼントさせて頂きました。足湯をした女の子は「わぁ～気持ちいい!! 幸せじゃ～」と大変喜んでくれました。

今回、岩手の作り手さんが、広島のために何かできないかなと申し出てくれました。そして、10 月 7 日に行われた 49 日法要でつかう、竹灯籠に灯すろうそくを作ってもらうことになりました。大船渡と釜石の作り手さんが、一生懸命ろうそくを作ってくれました。被災地から被災地へと支え合いの輪が広がっています。



▲ろうそく作りの様子

▼完成したろうそく



いま東日本の被災地では高台移転や土盛りをして宅地造成が進んでいますが、今回の広島の土砂災害をみて、自分たちの家は大丈夫なのか？山津波が起きるのではないかととても心配しています。

災害の教訓をいかし、犠牲になられた命を無駄にしないためにも被災地の復興は丁寧に住民の合意形成をとりながら進めてもらいたいと切に願います。

担当 増島 智子

20
th

阪神・淡路大震災から 20 年 KOBE 市民と NGO フォーラム 2015

阪神・淡路大震災から 20 年を振り返る『阪神・淡路大震災から 20 年 KOBE 市民と NGO フォーラム 2015』では、次世代が感じている「想い」を阪神・淡路からの経験のある世代へとぶつけ、メッセージとして発信していきたいと思っています。

次世代が、日々の生活やボランティア活動の中で感じている、「大切にすべきこと」を上世代がどう受け止め、一緒になってどのようなメッセージが出せるのかがこのフォーラムの一番の肝になるでしょう。

1995 年に開催された「市民と NGO の『防災』国際フォーラム」では、議論の内容を「いのちの木」として木の形にまとめました。今回のフォーラムでも、議論を出てきたキーワードを木の形にまとめようと思っています。

これからの社会を担う次世代が発信するメッセージがどのように「未来の木」を成長させていくのか、このフォーラムが第 1 歩となるような場としていきたいと思っています。
(頼政良太)

阪神・淡路大震災から 20 年 KOBE 市民と NGO フォーラム 2015

阪神・淡路大震災から 20 年を機に、次世代の担い手となる「若者」が中心となりながら、次世代に伝えたい世代の「想い」を受け止めながら、今伝えたいメッセージを作り出すフォーラムです。メッセージや想いを木になぞらえながら阪神・淡路大震災 20 年から未来への木を作り出します。次世代の「若者」も現役世代の方々も、次世代に伝えたい「大人」たちもぜひご参加ください。

日時：1 月 24 日（土） 10:00～17:00

場所：神戸まちづくり会館（神戸市中央区元町通 4 丁目 2 番 1 4 号）

プログラム

- ☑第 1 部 次世代を担う若者たちが、今大切にしたい想いを紡ぎ出す
- ☑第 2 部 伝えたい世代の「想い」とキーワード整理
- ☑第 3 部 次世代と伝えたい世代の「想い」を融合させ、未来の木へ

※フォーラム終了後、メッセージ（宣言文）作成のためのミーティングを 1 週間かけて行います。最終的なメッセージは 1 月 31 日に発表する予定です。



■入会・カンパのお願い

被災地 NGO 協働センターでは、会員を随時募集しています。普段なかなか活動にご参加できない方でも賛助会員等で活動に間接的にご参加いただくことが出来ます。ぜひよろしくお願ひします！

活動カンパ、事務局カンパも随時受け付けています。下記の振込先によりしくお願ひ致します。

- ★団体会員 年会費 ¥ 10,000 × 1 口以上
- ★個人会員 年会費 ¥ 3,000 × 1 口以上
- ☆団体賛助会員 年会費 ¥ 10,000 × 1 口以上
- ☆個人賛助会員 年会費 ¥ 3,000 × 1 口以上
- ☆自由選択会員 年会費 ¥ 任意の額

郵便振替 加入者名：被災地 NGO 協働センター
口座番号：01180-6-68556

■編集後記

こんにちは。今回も編集を担当しました頼政です。現在、広島土砂災害の担当になっていて、なかなかじゃりみちの編集ができず発行が遅れてしまいました。申し訳ありません。

ところで、広島といえば「お好み焼き」ですが関西ではよく「広島焼」という名称で呼ばれています。広島の方は「広島風お好み焼き」と呼ぶ人はいますが、「広島焼」と言う人はほとんどいません。広島焼と言うと怒る人もいるのでご注意ください。

ちなみにお好み焼きの中にイカ天が入っていたり、やっぱり関西の文化とは少し違いますね！



■事務局ボランティアも募集しています！

私たちと一緒に活動して下さるボランティアさんを随時募集しています！

初心者の方も全く問題ありません。ボランティアでの活動を通して、NGO や市民社会、防災・減災のことも学ぶことが出来ます。やる気のある方大歓迎です。ぜひお越しください。

当センターのメールアドレスが変更になっています。
新メールアドレス：info@ngo-kyodo.org
HP もリニューアル中です。URL: <http://ngo-kyodo.org/>

◎まけないぞうの作り手さんからのメッセージ

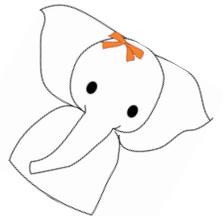


震災から3年が経ち過去の出来事として日本人の心の中から消えていくように感じています。福島から神奈川に避難していらした皆さんのさろんも資金援助が打ち切れ3月末で解散と聞きました。寂しい限りです。ポイントが貯まったのでタオルに交換しました。いつも東北の人々に心を寄せていらっしゃるみなさんのお役に立てれば幸いです。また、送ります。お元気で過ごして下さい。草々



月日の流れは早いこと、あの日、あの時より4年目となり、でも私の心の中には、いつも海、波に流れたことは、昨日の様に思い出す、恐ろしい事です。ただ、ぞうさんを作っている時だけは忘れます。ぞうさんの顔作りがいちばん大変、同じ形に出来ないこと。夢中になって作ります。私のぞうさんどこへ行くのかと元気でいてね。会えることを楽しみにして…。(陸前高田市仮設 75才女性)

Makenaizoneの編集長田中さんがアイルランドでまけないぞうを広げてくれています。「デイケアの友だちにもまけないぞう」を紹介するわね。被災地にいらっしゃるぞうさんの作り手さんに宜しくお伝え下さいね、写真は恥ずかしいけど…」と笑顔でポーズ!



まけないぞう作りに出会えて本当に楽しい日々を送っています。このまけないぞう作りでボランティアさんやいろいろな人達と仲良しになりました。本当にありがとうございます。これからもよろしくお願いします。(陸前高田市仮設 78才女性)



20年前に体感した「ユートピア」を、もう一度！ 映画『友よ！大重潤一郎 魂の旅』を観る会

この映画『友よ！大重潤一郎 魂の旅』は、岩波映画作成時代の友人である四宮鉄男監督が作られた映画だ。大重潤一郎さんのこれまでの映画人生を振り返りながらインタビュー形式を中心とした内容となっている。

今から20年前の1995年、沖縄の無人島を舞台にした映画『光りの島』が誕生した。大重潤一郎さんは五感で自然と向き合い、生と死の間を彷徨いながら、いのちを描き続け、翌1996年には『風の島』を完成させた。そして二作品の上映は沖縄と神戸から始まった。

それから5年、大重潤一郎さんは『縄文』『原郷ニライカナイへ』『ビッグマウンテンへの道』を世に出した。この三作に共通するテーマについて大重は、「人類が定住農耕と牧畜を契機に歩み出した制度社会以前の自然と一体となった営みの原点を気づかせられる」と語る。

大重潤一郎さんは、阪神・淡路大震災の時には大阪に拠点をおいて仕事をし、住まいは神戸に構えていた。3.11の後も被災地のことを心配していた。大重潤一郎さんの魂にはKOBEのいのちも、3.11のいのちも宿っている。そ

して、そのいのちは縄文から脈々とつながってきたいのちだ。

大重潤一郎さんが神戸新聞「論」に投稿した内容を紹介したい。

- (前略) 震災当時を振り返ってみると、まず人と人とのバリアが消え、みんなが生命のために一つになり「人間、捨てたもんじゃない」と感動した。その一方、あの非常時に制度を縦に実態に対応できない役所などがもたらす人災に怒った。臨機応変にフレキシブルな動きを見せたのが、ボランティアだった。その後、明石の花火事件まで、体制は管理責任のみを問い返し、人の生命を犠牲にしても何も変わらない。あたかも制度からは生命は遠ざけられてしまったかに見える。- (神戸新聞「論」2001.8.20より抜粋)

上映日：2015年1月14日、1月15日

上映時間：両日とも、午前11時～

上映場所：神戸アートビレッジセンター

神戸市兵庫区新開地5丁目3番14号

入場料：1000円(学生500円)

映画『友よ！大重潤一郎 魂の旅』を観る会

連絡先：被災地NGO協働センター 〒652-0801 兵庫県神戸市兵庫区中道通2-1-10

TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702 E-mail:info@ngo-kyodo.org